



特集 コロナの時代と福音

新型コロナウイルス（本号では特に必要のない場合は、「コロナ」と略します）で2020年が終わろうとしています。初めて経験するこの危機によって、社会や教会が直面する課題はなにか？ それらを私たちはどのように受け止め、祈り、未来を紡いでいくことができるのか？ 今回は、カトリック教会のさまざまな立場、分野で働く人々の声に耳を傾けます。

感染症の時代といのちの尊厳

■ 成井大介（新潟教区司教）

私はこれまでローマの神言修道会本部で、会が世界で行っている社会的活動の調整役を担当していたので、ローマで経験したこと、ローマで知り得た世界で行われているコロナ関係の活動から感じたことをお話したいと思います。

2月末から3月初頭、イタリア北部でコロナが爆発的に広がって、国全体が強制力を伴う

ロックダウンになりました。私はずっと共同体から出ない生活をしていたので、実は外で起こった出来事を知らないのです。一つだけ自分の目で見て感じることはできたのは、ホームレスの人たちの訪問と食事支援です。ロックダウンが始まって支援団体の約8割が活動を休止したなかで、神言会は休止しませんでした。それ

までローマでは毎日給食支援があったので、8割が休止したら、大変厳しい状況になります。ロックダウンは、たくさんの人たちの命を守るために行われますが、それによって逆に命を脅かされる人がでてくるのです。そういう人たちにこそ、教会は寄り添い続けるべきだと思います。イエスがこうした社会の歪みに取り残されてしまった人たちを一番愛されたからです。イエスが愛した人たちのもとに、私たちも生き続けることが大切だと思います。

メキシコは、ラテンアメリカから米国への移民の通り道です。貨物列車やトラックの荷台などに乗ったり、徒歩で北米への移住を試みるわけですが、ところがコロナで国境が閉鎖され、自国へ帰る移民の逆流状態が起こったのです。メキシコには「移民の家」という、民間の人道支援団体が設置する無料宿泊施設がたくさんあり、移民の人たちはそこで休んでは旅を続けるのですが、コロナでかなりの移民の家が閉じてしまい、普段でも多くの人々が死んでいく状況にあって、ますます厳しい状況になってしまったのです。神言会の移民の家は開け続けることを決断し、今も受け入れを続けています。

インドでは、ロックダウンで移民労働者、少数民族の人たちが仕事を失い、何百キロもの道を歩いて故郷に帰還する人たちであふれました。そこで神言会の経営する学校を開放し、警察と相談し、バスとかトラックの準備するといった支援活動をしています。

こういう活動には、施設で感染者がでるリスクがあるとは思っています。しかし援助から漏れてしまう人たちは、だれかが気づかないと、す

ぐにでも死んでしまうのです。

レビ記13章には皮膚病の人について書いてあります。祭司のところにつれていかれて「あなたは汚れている」と宣言され、彼、彼女は、街の外で生活しなければなりません。ちょっと見れば皮膚病の人だとわかるように、その人は、衣服を裂き、髪をほだき、口髭を覆い、「私は汚れたものです」と叫ばなければならない。福音書にはイエスがそうした重い皮膚病の人を治す場面が出てきます（マタイ8・1-4、マルコ1・40-45、ルカ5・12-16）。本来なら、感染者は人に近づいてはいけないわけですが、この人はイエスを遠くから見つけて近づいて「御心ならば、私を清くすることがおできになります」と言います。イエスは深く憐れんで、その人に触れて病気を癒され、「行って祭司に体をみせ」なさい、と言います。レビ記14章には、病気が治り社会的に復帰するために、「あなたは清い」と宣言してもらう必要があることが書かれています。

イエスは、病気を直すだけではなく、出会い、心を揺り動かされ、触れあうことを通して、一人の尊い人として感染した人を受け入れ、さらに社会的尊厳の回復のアドバイスもした。人の命の尊さを、肉体や病気だけではなく、感染しているかどうかだけではなくて、感情、精神、霊的、社会的、様々な側面から全体的に見て、大切にされた。それがイエスの人との接し方でした。そもそも、こうした様々な側面は切り離して扱うことができるものではありません。それらがぜんぶあって、人の尊厳は尊重されるのだと思います。（2020年8月5日）

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わり

梶山義夫（イエズス会、イエズス会社会司牧センター所長）

緊急事態宣言の最中、駒場の修道院のコックさんもステイホームで、修道院のメンバー6人で交互に夕食を作るということになり、ある日、夕食の買い物に行きました。私くらいの年頃の

主婦が前から来て、ふいに「お互いに頑張りましょうね」と声かけられました。とっさでびっくりしました。周りを見回しても自分しかいないのです。「頑張りましょう」と言われても、

私は「頑張る」ということばがあまり好きではないし、頑張って生きていませんし。それなのに、なぜかそのことばが、ずっと心の中に入ったのです。次の日の朝のミサで、「主イエス・キリストの恵み 神の愛、聖霊の交わりが、みなさんとともにありますように」と唱えたとき、前の日の「お互いに頑張りましょうね」という言葉が心に響いたのです。

主イエス・キリストの恵みとは何なのか。それは神の言葉、特に福音書ではないかと思いました。生き方の根底に、ど真ん中に、これらはあるだろうか。イエスのように生きていく使命に私たちは十分応えているだろうかと問われているなと思いました。

神の愛—大きなチャレンジです。現在、医療関係者をはじめ、いろいろな人が神の愛の協力者になっています。しかし他方で、多くの命が押し潰されているのも事実です。それはコロナ感染という命の危機ではありません。社会的に孤立している人はさらに孤立している。日頃から虐待を受けて、家庭が安全な場所ではない人たちにとって、ステイホームって、いったい何を意味しているのだろうか。外国からの労働者、技能実習生、開発途上国の貧しい人々は、いかに食事の確保するかが課題になっている。貧しい人たちがさらに厳しい状況に追い込まれているのが事実です。そしてさらに、社会の奥底には別の問題があると思います。差別、あるいは社会的排除、そういう悪の力が、感染の恐れを利用して社会の中に蔓延している。古くから日本社会に根付いている差別や穢れの意識、そういったものへの恐れ。それに対して自分たちを守る、排除する、そういう動きがあると思いま

す。医療関係者や感染の疑いのある人、国境閉鎖のなかで、難民や、難民と認定されない人たちへの差別が広がっています。私たちは、神の愛をこの世界で実現するという使命を受けています。そのためには、新しい形で神の愛が実現するための創意工夫が求められているのだと思います。

聖霊の交わりとは何を意味しているのでしょうか。5月から6月の初め私は「一杯の愛のお米」というプロジェクトに加わりました。お米を買うことにさえ困っている人たちに、段ボールに米、砂糖、油、カップ麺、マスクなど五千円程度のものをつめて配るのです。そこで私は宛名書きの仕事を手伝いました。そうすると、どんなアパートなのか、アパートに3~4人で住んでいるという現実が見えてきました。アルバイトを失ったり、実習先が閉鎖になったり。北海道の稚内から沖縄の離島まで、全国に様々な形で困っている人たちがいることがわかりました。そして私は、このプロジェクトのネットワークに参加しているんだな、いのちの交わりにいま参加しているんだな、それは、いのちの与え主である聖霊の交わりに参加しているということなんだな、と実感しました。

みなさんは、どのようにして主イエスの恵みを受けているのでしょうか。また主イエス・キリストの恵みに満たされて、どのようにして神の愛を表そうとしているのでしょうか。どのようにして聖霊の交わりに参加しているのでしょうか。

主イエス・キリストの恵み 神の愛、聖霊の交わりが、みなさんとともにありますように。

(2020年7月7日)

我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう

■ 石川治子（聖心侍女修道会、子どもと女性の権利擁護のためのデスク秘書）

なぜコロナ感染が起きたのでしょうか。世界的に有名な霊長類学者、ジェーン・グロド博士は、人類が自然を無視し、生物や動物を軽

視したことに原因があり、それは前から予想されてきたことだと言っています。人間が森を破壊すると、森に住んでいた動物たちが追いやら

れ、動物間で病気が伝染して人間にも伝染してしまうということだそうです。人間は自然界に依存しており、自然を破壊することは、人間の将来、特に子どもの将来を破壊することだと言っています。国連は1月6日、気候変動、人間による自然破壊が増えれば、コロナ感染のような感染症もますます増えるだろうと発表しました。コロナばかりでなく、いま、大雨、洪水、崖崩れが毎年のように起こり、多くの人のいのちや生活が奪われています。これも、自然界との共存を無視して人間が身勝手に経済、利益、効率を優先したツケではないでしょうか。

コロナ騒ぎによって明らかになったのは、格差社会の実態です。格差はよりいっそう深刻になりました。倒産、ホームレス、失職、希望を失って自死に至った悲劇もありました。それに対する政府の対策はどうだったでしょう。特別給付金10万円が4月20日に閣議決定したのに、7月になっても支払われない人がたくさんいました。毎日の生活に事欠く人たちにとっては一刻の猶予もないのです。また、感染予防対策のために経費がかかり、患者や利用者が減って経営難となった病院もあります。東京女子医大ではボーナスゼロ、看護師400人が退職願を出したとニュースにありました。医療従事者がストライキをして訴えているということもありました。彼らに対する政府の対応はあまりにも貧弱です。

一方、国会議員には320万円の夏のボーナスが遅滞なく支払われました。聖路加国際病院の実験によると、アベノマスクは漏れ率100%、ウイルスの取り込みにほとんど効果ないことがわかりました。このマスクに466億円も使われたのです。GO TOキャンペーンに1兆7000億円、大企業に出資1000億円、その返済は不要。でも、中小企業には貸付です。米国の欠陥戦闘機購入に2兆円、リニア新幹線に3兆円、沖縄の辺野古の土木工事だけで2兆5千億円、それだけでは足りないとも言われています。安倍首相がこの6年間に海外にばらまいたお金は約60兆円。これらの莫大なお金が社会の一番困って

いる人に配布されたらどんなに助かるでしょう。

私たちはもっと聖なる怒りを持ってもいいのではないのでしょうか。コロナ騒ぎからどんなメッセージを受けとるべきでしょうか。私たちはいま、どう信仰を生きるよう、促されているのでしょうか。

創世記の創造神話を思い出します。私たちは神に象られて作られた人間、神の似姿なのです。一人一人、神の大切な存在として、目の瞳のように見守られている。人間を創造するときに、神様は「われわれに似せて人を作る」と、ご自身を「われわれ」と複数で言われました。それは、交わりの神である「われわれ」です。私たちは、交わりの神に似せられて作られたのです。

私たちが互いにつながって、「われわれ」の神の似姿となるように、我々皆が、ひとりも置き去りにされないように、つながる。そんな似姿としての私たちです。聖パウロは言います。あなた方はキリストの体であり、一人一人は各器官である。体の一部が苦しめば、体全体が苦しみ痛みます。深い傷を負えば、意識がそこに集中し、直そうとします。いま、コロナによって苦しんでいる多くの人たち、いのち、人としての尊厳が侵害され、痛み苦しんでいる人に、心をかけ、寄り添い、共に歩むことができたなら、そんな生き方ができたらと、いつも願っています。神が一番小さくされた人を通して、私たちと親密に関わろうとしているのではないのでしょうか。

(2020年7月22日)

注：

*ここに掲載した3つの記事は、ビデオシリーズ、ワンポイントメッセージ「コロナの時代と福音」から再編集したものです。正義と平和協議会では、6月から同シリーズをYoutube配信しています。ご関心のある方はぜひアクセスとチャンネル登録をお願いいたします。



パックス・クリスティ フランダースからの贈り物

9月1日、日本カトリック正義と平和協議会事務局は、パックス・クリスティ フランダース (Pax Christi Vlaanderen) から送られてきた千羽鶴の贈呈のために、東京都江東区夢の島公園にある、都立第五福竜丸展示館(表紙写真は8月16日撮影)を訪問しました。

千羽鶴は、ベルギーの全国の市民が、75年前の広島、長崎の原爆投下を祈念し、核兵器廃絶の祈りを込めて折り、広島の前日である8月5日にルーヴァン市に集められ、ルーヴァン市長立席のもとで記念式典が行われたのち、広島、長崎、東京に向けて発送されました。正義と平和協議会では、2000回も行われた核実験の被害の実態とその歴史の意味について、この機会を使って、もっと世界中の人々に知ってもらいたいと考え、都立第五福竜丸展示館への贈呈を希望しました。

第五福竜丸は、1954年3月1日、米国が太平洋ビキニ環礁で行った水爆実験の被害を受けました。現地の方々や当時太平洋で漁をしていたたくさんの他の漁船の乗組員の方々も被爆し、癌や健康障害で亡くなったり、今もひどい後遺症に苦しんでいます。ビキニ水爆実験による第五福竜丸の被害がきっかけとなり、日本各地で水爆実験中止、原水爆反対の声が高まり、そして世界に広がりました。第五福竜丸の船体は、その後、東京湾の夢の島がゴミ埋立地だった頃、その中に棄てられていました。この船を沈めてはいけなと感じた多くの人びとが、ゴミの中に通ってこの船を守りました。東京都がこの展示館を作り、今年44年となります。

9月1日は、都立第五福竜丸展示館から、安田和也主任学芸員、市田真理学芸員、正義と平和協議会から、シスター弘田しずえ(国際パックス・クリスティ)、イグナシオ・マ



展示された折鶴



折鶴に書かれたメッセージ

ルティネス神父(カトリック中央協議会)が立ち合い、それに勝谷太治司教(正義と平和協議会会長)が札幌からオンラインで出席して、千羽鶴の贈呈式を行いました。

核兵器のない世界を求める人々の運動は、粘り強くつづけられています。2017年には核兵器禁止条約も採択されるにいたりました。核兵器のない世界の実現には、高い厚い壁があります。核兵器を持つ国とその核の傘の下に入ろうとする国々は、核兵器禁止条約を認めないばかりか、核兵器の廃絶にも取り組もうとしません。しかし、私たちはあきらめることなく、平和への願い、核も戦争もない世界の来る日まで取り組みをすすめていきましょう。

(安田主任学芸員のあいさつから)

カトリックHIV/AIDS デスクに聞く

●河野小夜子

(HIV/AIDS デスク委員・ねぎし内科診療所看護師)

私は金曜日～月曜日の午後1時から8時まで診療所で働いています。この曜日・時間帯に診療するのはHIV感染者の人々が仕事をしながら治療を続けられるためです。採血していると、患者さんから「HIVと新型コロナは似ているね」と言われました。私自身もコロナ感染者に対する差別や偏見を見聞きしてHIV感染者への偏見と差別に似ていると感じていたので、思わず共感しました。

差別・偏見を考えていた時、終戦後75年に合わせて原爆被害者に対する差別についての報道が目にはいりました。被爆した人は、病気がうつると忌み嫌って排除されていたそうです。被爆による身体的苦痛に加えて、人々から疎外される孤独・絶望感は想像を絶するものだったと思われまます。また、2011年、東日本大震災での東京電力福島第一原子力発電所事故後、福島からの避難先で差別・偏見があり、特に子どもたちが学校でいじめの対象になっていました。放射能は感染しないと分かっているにもかかわらず排除してしまうのです。

HIV感染者が初めて報告された時、日本中がパニック状態に陥ってしまいました。感染者の名前やスナックの顧客の名前などを得るため多くの報道関係者がその土地に集まりました。また「良いエイズ」「悪いエイズ」と言って、血液製品で感染した人は「良いエイズ」：彼らは被害者であり、それ以外の感染者は自分の行動で感染したため自業自得で「悪いエイズ」として差別する気風がありました。

今回のコロナ感染者に対する誹謗・中傷はHIV感染者への差別とよく似ています。HIV感染者は社会や職場から差別・偏見を受けていました。今も多くの感染者が周囲にHIV感染の事を隠しているのは差別・偏見を恐れているからです。

HIV感染者とコロナ感染者と違うところは、エッセンシャルワーカー（医療従事者や運送業者など）に対する差別・偏見があることです。彼らが感染源になるのではという疑心暗鬼から排除の動きがあったようです。その結果、医療従事者の子どもたちが保育園への登園拒否や小学校でのいじめなどが報告されています。また長距離トラックの運転手の家族が入学式への式典出席を断られ、別室での参加となったなど多くの事例が報告されています。

日本人は他の国の人と比較してコロナ感染を自業自得だと思う人が多いという研究報告があります。日本人は11.1%、中国人は4.83%、イタリア人2.51%、イギリス人1.49%、アメリカ人1%の人が自業自得と考えています*。このことから、他の国と比べていかに多くの日本人が、自分に責任があると考えているのかが分かります。

コロナに感染したかどうかはPCR検査や抗原検査で分かります。より多くの人に検査を、と言われていますが検査体制や医療体制などのキャパシティの関係で思うように検査数が伸びず、必要のある人にもなかなかすぐには検査が出来ない中で、医師から検査を勧められても検査を拒否する人もいます。理由として、検査で陽性になると職場や保育園などへの対応に追われたり、家族への差別を気にしているからです。またHIV感染者の中にはコロナに感染して入院すると、自分がHIV感染者である事が発覚し更なる差別を受けるのではと不安を抱えている人もいます。

偏見や差別は無知による不安からくると言われています。コロナについて学び、自分で考えて行動すること、また自分も当事者になりうることなど考え、他者を思いやる心が大切です。これはコロナに限らずHIV感染者などにも言えることだと思います。

*大阪大学大学院人間科学研究科三浦麻子研究室の調査による

●宮本信代 (HIV/AIDS デスク委員)

澄み渡った青空の晩夏のサンフランシスコ・カストロストリートを訪れたのは1987年。カトリック女子高校の養護教諭として勤務していた夏休みを利用して、アメリカへ10日間の性教育研修旅行に出かけたのでした。

カストロストリートには、ゲイの方たちが多く住み、あちらこちらでレインボーフラッグを目にしました。レインボーフラッグには、アイデンティティを失わず、自分の存在に誇りをもつこと＝“プライド”の意味が込められ、6色のレインボーは多様性を表しているそうです。通りを歩きながら、異性愛者である自分が少数者であることを実感、それまで自分の中にあつた同性愛者に対する差別・偏見の気持ちが、音を立ててガラガラと崩れた気がしました。ゲイの方たちにHIV感染が広がっている時期で、感染防止の安全な性行為について制作されたプログラムを視聴しました。帰国後、カストロストリートが、これまでにLGBTに関連した政治運動やイベントなどの舞台ともなり、LGBTコミュニティのシンボリック存在の一つとなっていることを知りました。

日本では、1985年に国内初のエイズ患者が報告され、第1号認定の後に、非加熱血液製剤を原因とする感染もあったことが判明、いわゆる薬害エイズ事件として、大きな社会問題となりました。

1998年3月、勤務校の経営母体施設の1つ、ローマにあるエイズ患者のための家を訪れたのがきっかけで、同年から「エイズ電話相談 (HIVと人権・情報センター)」に関わりました。10代の電話相談分析から、＜ヤングのためのエイズ学習プログラム＞が生まれ、勤務校他で授業を展開しました。2003年から月2回の日曜日にHIV抗体無料検査 (VCT: Voluntary Counseling Testing) が始まり、2019年までカウンセリングスタッフとして参加しました。「HIVとAIDS」「感染経路」「予防」「治療」について伝えましたが、「今日は検査に来てくださって、

本当にありがとうございます」が開口一番の声がけでした。不安を抱えたままにしないで、まず検査を受けていただくことが重要なのです。

1996年以降、治療技術の開発が進み、早く治療を始めることで、AIDSの発症を遅らせることができるようになりました。治療薬を飲み続けることで血中のウイルス量が減ったら、コンドームを使わなくても性交渉による他者への感染はゼロであるというのが、現在世界的に言われています。

2020年1月に国内初の新型コロナウイルス感染症患者が報告されました。感染拡大の時期、4月から5月にかけて、緊急事態宣言が全都道府県に発令され (第一波)、人と人との距離の確保、マスクの着用、手洗いをはじめとした「新しい生活様式」が求められました。感染拡大が収まったかに思われたのですが、7月から国内で再び大都市を中心に感染拡大の状況 (第二波?) です。各都道府県感染者数の報告がメディアで流され、クラスター発生、また感染経路不明も多いと知ると不安が募ります。8月初めには、墓参などのため東京都から地方に帰った人の生家に帰省を中傷する内容の紙が投げ込まれたそうです。コロナ禍は、こんなふうにも、排斥意識を生じさせるのですね。

残念ながら現時点で確立した治療法は見つかっておらず、改めて感染症とどう向き合うべきかという課題を突きつけられているように思います。その答えは「Withコロナ」共に生きるということかもしれません。

四旬節にSNSで、イタリアのベルガモ市で作られた動画が届きました。ベルガモは新型コロナウイルス感染症の為に多数の死者を出した町で、ある作曲家がベルガモの医療従事者を勇気づけ励ますために、この動画のBGM: *Renascero Renascera*を作ったそうです。

夏が終わろうとしている今、「*Renascero* (私は生まれ変わるだろう)、*Renascera* (あなたは生まれ変わるだろう)」が耳の奥で響いています。〔参考〕<http://youtu.be/D5DhJS5hGWc>

カリタス・ジャパン「新型コロナ緊急募金」

■ 飯島裕子（ノンフィクションライター、カリタス・ジャパン啓発部会委員）

世界をコロナショックが襲ってから半年近くが経つ。この間明らかになってきたのは、ウイルスそのものの恐ろしさもさることながら、経済活動の停滞により、破壊的な影響を及ぼされた人々の存在だ。その多くはコロナショック以前から、経済的に困難な中、ギリギリの生活を強いられてきた人々であった。

カリタス・ジャパンでは4月から「新型コロナウイルス感染症緊急募金」を開始。①住まいの確保、②食料医療の確保、③居場所の確保、④滞日外国人のケア、⑤優先される方々へのサポート、⑥情報の保証、⑦医療支援、のいずれかに重点を置いた取り組みを行う団体などへ、資金援助を実施してきた。

2020年8月末現在、募金合計額は7500万円を超え、34団体への支援が実施されている。各団体についてはカリタス・ジャパンHPに詳しいが、その活動内容からコロナ禍で仕事を失い生活に困窮する人、支援の枠外に置かれた外国人、ステイホームの影響でDV被害に遭う女性や子どもの存在などが浮き彫りになってくる。

ここではカリタス・ジャパンの緊急募金に応募された団体のうち、生活困窮者、路上生活者、DV女性支援等を実施している三団体の活動を紹介することで、コロナ禍が人々にどのような影響を与えているのかについてみていくことにしたい。

屋外での相談会を実施—府中緊急派遣村

「府中緊急派遣村」は2009年に府中市で実施した派遣村を皮切りに発足した団体であり、生活相談、労働相談、野宿者支援、困窮家庭への食糧支援など幅広い活動を実施している。コロナ禍でも4月末に府中市で5月末に国立市で「困りごと相談会」を開催（写真）。弁護士らが直接相談に応じたほか、フリーダイヤルでの相談、食品配布なども行われた。



5月末に国立で開催された「困りごと相談会」

府中緊急派遣村共同代表の松野哲二さんは、「リーマンショック後の相談会では男性からの相談が大半でしたが、今回は女性からの相談も多く驚いています。コロナによる影響が広範囲にわたっているのだと思います」と話す。過剰なほどの自粛ムードが蔓延する中、相談会を安全に実施できるか不安もあったというが、近隣から食糧をもって駆けつけてくれる人や役所の協力などもあり、多くの人が支援に繋がる機会となった。

もう一つコロナ禍において問題となっていたのが、活動拠点が狭いことによる“三密”の問題だった。事務所機能のほか、シェルターとしての利用やアパートに入居した人たちが定期的集まり交流する場として重要な役割を果たしていたが、三密を避けるため、集まりを休止していたという。今回のカリタス・ジャパンの緊急募金によって新たな拠点「コロばぬ荘」を確保したことで、三密を避けて活動できるようになった。

「シェルター機能の充実に加え、こども食堂や学習支援の場としての利用も考えています。住まいを確保することがゴールではなく、むしろそこからの道のりのほうが長い。高齢者も多く、一人孤立してしまう人も少なくありません。皆が気兼ねなく集える居場所を作っていく」と松野さんは話す。

くにたち夢ファーム—女性からのSOSが殺到

女性のためのシェルターと居場所を運営している「くにたち夢ファーム」では一斉休校が始まった3月初旬ごろから相談が急増した。DV被害に遭っていた女性が夫の在宅勤務が決まった直後、逃げてきたケースやネットカフェを転々としていた人が緊急事態宣言による営業停止で居場所を失うケースなど、コロナ禍によりギリギリのところまで何とか生き延びて来た人々が外に放り出された形だ。

シェルターや婦人保護施設などが全国に設置されているものの、一時的な利用にとどまり、またDV夫の元へ戻ってしまうケースも少なくない。「くにたち夢ファーム」では緊急避難的につながった女性たちがその後、近隣で家を借り、生活の拠点を築くことができるよう、長期的視野に立ったサポートを行っている。またシェルター利用を夫からのDV被害に限定している自治体もあり、単身女性は利用できない場合もある。「くにたち夢ファーム」はそんな女性たちの受け皿にもなっている。

カリタス・ジャパンの緊急募金によって女性たちの住まいとしてアパート3部屋を借り上げた。

「空き部屋ありますと公表したわけではないのですが、2週間ですべて入居者が決まりました。ステイホームの影響で家族間トラブルが急増し、ギリギリ耐えてきた人が追い詰められ、決断を迫られている。ピンチはチャンスではないけれど、こんな時だからこそ自分と向き合い、よりよい決断ができるようサポートしたい」と話すのは、「くにたち夢ファーム」理事の遠藤良子さん。

きちんと寄り添うことで、コロナ禍は、DVに長



さやかなウェルカムグッズには「あなたの新たな人生を応援します」というメッセージカードが添えられていた

年苦しんできた人やネットカフェを転々としてきた人が一歩踏み出すチャンスになり得るのだろう。

聖イグナチオ教会—炊き出し、訪問、シェルター

聖イグナチオ教会では、ミサが非公開になった後も、週1度の炊き出し（カレーの会）、見守り活動（四ツ谷おにぎり仲間）など、路上生活者のための活動を休むことなく続けてきた。5月にはシェルター「あしたのいえ」の運営をスタートさせている。

「カレーの会では接触を避けるため、信徒会館で食べることができたカレーはやむを得ず手渡すだけにするなどの対策を行っています。毎回150人程度だった人が、3月以降、一時は200人を超えており、深刻さを感じています」と話すのは、イエズス会の吉羽弘明さん。四ツ谷おにぎり仲間では食糧を配るだけでなく、生活保護の申請同行などを行うこともある。

家がない場合、生活保護を申請した後も無料低額宿泊所に入居させられるケースが多いが、集団生活のため、コロナ感染のリスクも高い。またDV被害から逃れた女性などが安全に滞在できる場所も欠かせない。

「あしたのいえ」は教会と契約を結んだ生活困窮者を支援するNPOを通して利用される仕組みだ。

「シェルターにたどりついた人が少しでも安心できるように、住環境づくりには力を入れました。必要な人に届くことを願っています」（吉羽さん）

三団体の活動を通して、コロナ禍における困難な状況を見てきた。いずれも緊急性、機動性を重視する一方、長期的、包括的な視点に立ち、生活を立て直した後、関係性を築き、安心できる居場所を得ていくことを重視していることに気づく。目先のことに目がいきがちなコロナ禍の今だからこそ、考えさせられる視点であるだろう。

カリタスジャパンでは引き続き新型コロナウイルス緊急募金を実施している。詳しくは<https://www.caritas.jp> まで。

日本カトリック難民移住移動者委員会（J-CaRM）では…

コロナ感染症の影響は、ふだんから日本社会の中で弱い立場に置かれた外国人移住者・難民の人々に、より深刻な打撃を与えていることが日々明らかになっています。J-CaRMでは、4月から5月にかけて、言語別の司牧担当者の方々と教区センターなどから、各地での外国人移住者・難民の人々の状況と必要な支援についての声を集めました。共通していたのは、移住者・難民の生活困窮の状況です。技能実習生や留学生からは、仕事がなくなり困窮して食べ物も買えないという訴えが、多数寄せられました。仮放免の家族や留学生などもっとも困窮している移住者にお見舞金として現金給付支援を実施している教区も複数ありました。

特別定額給付金の給付を確実に受けるために

新型コロナウイルス対策として、日本政府が一人10万円の支給を決めた「特別定額給付金」は、本来は日本に住むすべての人を対象とすべきです。ところが、基準日（4月27日時点）で住民票に登録のある人を対象と決めたため、一定数の外国籍者はその対象外とされてしまいました。J-CaRMも加盟する外国人支援のネットワーク団体などでも粘り強く要請を続けた結果、5月20日に新たな方針が示され、元技能実習生や留学生、その他技能や家族滞在などの在留資格で滞在していた人が、雇用契約終了や学校卒業などにより3ヶ月以下の在留資格に変更したものの帰国困難になっている場合、また難民の子どもで在留期限が3ヶ月以下の場合などにも対象が拡大されました。しかし、こうした情報の周知は十分ではありません。そもそも対象となる移住者であっても申請書は日本語で記入する必要があり、周囲のサポートを必要としています。そこでJ-CaRMでは、こうした情報をわかりやすく説明した支援者向けのハンドアウト「コロナ給付金（1人100,000円）は外国人にも給付されます！」と、当事者・支援者向けのチャート

「100,000円の給付対象者チェックリスト」（日・英、スペイン・ベトナム語版）を作成しました。6月11日には、教区担当者や司牧担当者向けのオンラインセミナーも実施し、必要な情報をホームページにも掲載しています。

給付金の対象外となる移住者・難民への生活支援金

J-CaRMでは、全国の教会から届く「世界難民移住移動者の日献金」をもとに活動を行うJ-CaRMの「緊急一時援助金」の枠組みを拡大して、特別定額給付金の対象外とされてしまう難民申請者や非正規滞在の家族に、コロナ禍であとひと月生き延びるための「お見舞い金」として現金給付を行うことにしました。

技能実習生の労働問題などへの取り組みでの協力と連携を

ベトナム人司牧者らの食料支援でも「今回のコロナの影響により仕事がなくなったり減らされてたりしても休業手当がもらえない」「事業所の継続が危ぶまれて解雇の危険性がある」などの訴えが届いています。契約が終了した技能実習生から在留資格などの相談も寄せられています。具体的な解決を支援するため、6月9日（火）と7月4日（土）、外国人技能実習生権利ネットワークとの共催で「新型コロナベトナム人技能実習生ホットライン」を実施しました。東京、札幌、岐阜、大阪、北九州に拠点を設置し、技能実習生問題に取り組む弁護士や労働組合の専門家と、カトリックのベトナム語相談員・通訳、記録担当者がチームで相談対応しました。コロナの影響による相談が多く寄せられた一方、雇用主や日本人同僚からの暴力や残業代未払いなど、以前から多く指摘されてきた技能実習制度の問題も寄せられました。

（ニュースレター「J-CaRM News」No. 5、2020年6月発行を事務局で一部編集して転載）



撒きもせずつむぎもせずに (典礼聖歌集391番)

■ 宇井彩野 (フリーライター)

「命のために何を食べ、何を飲もうか、また体のために何を着ようかと、思い煩ってはならない」(マタイ6・25)

この箇所が、ずっとよくわからないと思っていた。着るものや食べるもののことをまったく心配する必要がないほどに、余裕のある収入を得たことなどないし、余裕がなければ思い悩むのは当然だ。

新型コロナウイルスによって、想像もしていなかったような日常がもたらされてから、もう半年が過ぎる。

自粛や休業要請によってさまざまな業種が打撃を受ける中で、在庫を抱えた商店などから、通信販売の告知がSNSを通じて出回ることがたびたびあった。そういう時に、支援を呼びかける善意の人々がよく「経済を回そう」という言葉を使っていたことを記憶している。

今や、「ウイルス対策を優先するか、経済を優先するか」は各国政府の方向性を見極める、一種の物差しとして考えられるようになったため、この2つが矛盾し合うことは以前より明らかになってきたが、当初はもっと混乱していたように思う。よりミクロに視点を寄せれば、今もなお「ウイルス対策が不十分な個人」を責めることと、経済活動を促すことが、人々の正義感の中に同居している場面はありそうだ。

このウイルス蔓延の日常に入ってから、私自身よく考えるようになったのは、「経済はストップすることがある」ということだ。国や地域経済レベルで考えれば、災害や戦争・紛争などによって経済活動が困難になることは稀ではない。個人レベルならば、失業、傷病、家族の介護などあらゆる理由が想像できる。そしてウイルスは、世界中の国や地域や個人の経済活動に、ほぼ同時に困難をもたらした。

この期間を最低限の経済活動でなんとか持ち

こたえ、ウイルス蔓延が終わった暁に経済復興することが解決策だと考えている人は多いかもしれない。しかし、そもそも私たちは、経済が動き続けなければ打撃を受けるシステムで社会を形作ってきたことを、振り返り疑問視すべきなのではないだろうか。いつかまた、何かの原因によって、世界や国、地域、個人の経済はストップする。そのたびに生活を脅かされ、命をつなぐことすら危機にさらされるシステムは、間違っていたのではないか。

働く若者のグループJOC(ジョック)では、コロナ禍で生活や仕事にどのような変化があったか、十数人の若者から証言を集めた。これはJOC JapanのFacebookページでも閲覧できる。

失業や、非正規労働の勤務を減らされたことで、経済的打撃を受けている若者もいる。一方で、会社の利益のためにウイルスに脅えながらも同じように働き続け、雇用主に疑問を持つようになったという若者もいる。

生きていくために仕事をしているのに、その仕事先で、雇用主の利益のために命を危険にさらすことが求められる。これは、コロナ禍に限った話ではなく、これまでも過重労働によって、または危険な労働現場、ハラスメントのある労働現場で起こっていたことだ。

私たちは常に思い煩わされている。

「命は食べ物にまさり、体は着るものにまさっているではないか」

私たちの命は、その命を支えるための経済活動よりもまさっているはずなのに。

そして、種をまくことも刈り入れることも、倉に納めることもできなくなった時にも、私たちの命は養われるべきなのだ。

この福音で語られているのは、基本的人権の話であり、ベーシックな保障の話であるのかもしれない、と思う。

- 1 特集 コロナの時代と福音 …… 成井大介／梶山義夫／石川治子
- 5 パックス・クリスティ フランダースからの贈り物
- 6 カトリックHIV/AIDS デスクに聞く …… 河野小夜子／宮本信代
- 8 カリタス・ジャパン「新型コロナ緊急募金」 …… 飯島裕子
- 10 日本カトリック難民移住移動者委員会(J-CaRM)では…
- 11 (連載第7回)シロツメクサの花かんむり
撒きもせずつむぎもせずに …… 宇井彩野
- 12 まんが「修練者の石橋さん」

表紙写真 8月17日-18日、第6回韓日脱核巡礼と懇談会日本側企画をオンラインで開催しました(韓国側現地学習企画はコロナのため延期)。写真は18日、おしどりマコさん、ケンさんの都立第五福竜丸展示館(東京、江東区)ライブ中継の様子。(カトリック新聞編集部撮影)



苦虫のつぶやき

札幌地区正義と平和協議会から、札幌教区正義と平和協議会へ

この4月、「札幌地区正義と平和協議会」は「札幌教区正義と平和協議会」となって再出発した。これを機にこれまでの歩みをふりかえてみたい。

「札幌地区正義と平和委員会」は札幌地区での活動をめざし1975年に発足して以来、札幌、小樽、札幌での3度の全国集会開催、また、1986年ジェル・ロー神父による「指紋押捺拒否」支援、泊原発廃炉運動などなど、さまざまな課題に対し、誠実に活動を続けてきた。

昨年秋には「札幌教区6地区担当者会議」(函館・苫小牧・旭川・北見・釧路/帯広・札幌)を開催し、各地の活動状況や外国人労働者の人権、子どもの虐待、IR(統合型リゾート、いわゆるカジノ施設などのこと)誘致問題、アイヌ、貧困などの諸課題について共通の理解が得られた。そこで担当者会議を札幌「地区」から札幌「教区」へとエリアを広げた「札幌教区」正義と平和協議会に改編し、全道的な運動展開をめざすことが承認された。「平和・人権・脱原発・環境」を主な課題とし、年1回各地区代表者による総会の開催などを決定した。活動を始めてから、50年近く経ったが、各教会でも、応援、協働してくださる方が増え、少しずつだが、活動が定着し、認知されて来た実感している。

これからも、設立以来のテーマ「人間の生命の尊重と権利、そして神様の愛と平和の実現を目指します」を改めて心に留め、活動していきたい。(山口雄司：日本カトリック正義と平和協議会委員、札幌教区信徒)

編集後記

広域暴力団のトップ争いみたいな派閥抗争で自民党総裁選がおわった。安倍前首相がうやむやにした数々の不祥事が、このまま菅新首相にもちこされて揉み消され、お蔵入りしてしまいそうだ。「なんでもあり」。でもこの言葉を使えるのは、ほんとうは社会の中のほんの一握りにすぎない。その裏側では、庶民が理不尽を黙って耐えしのび、それが表裏びったりあわさって今の社会がつくられている。コロナという現象は、そんな一握りの人々のとんでもないいい加減さを暴いたのに、私たちはそこから脱却できないどころか、諦めムードが、コロナウイルスとともにいよいよ感染拡大している。7枚の黒いマスクをつけて全米オープンテニスに優勝した大坂なおみさんの言葉を聞こう。「皆さんがどんなメッセージを受け取ったかが、より大切です。いろんな人がこの問題を考えてくれるきっかけになればいい」。私たちは、この日本社会で、あるいは教会で、この言葉をどう受け取るだろう。そしてなにをすべきと考え、行動するだろう。たとえどれほど孤立しても。(h)



発行日 2020年10月1日(隔月発行)
 編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
 〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
 TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
 E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円(送料共)
 郵便振替 00190-8-100347
 加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>